

No.107 黒鳥 晴男 —無題—

Haruo Kurotori

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年2月15日付 立川市市報記事より

黒鳥晴男さんの作品のほとんどは円錐形だ。この車止めも強化ガラス繊維でできている。この間もテレビの朝の番組で、この作品を砲弾のようだと言っているアナウンサーがいた。

作家は円錐という、もともと美しい形の中から、最もシンプルで美しい円錐を探し出そうと思っているようだ。

彼の仕事ぶりは純粹を追い求める求道者のようだが、その作家が街の中の車止めという機能に果敢に挑戦したことに敬意を表したい。現実の規定でがんじがらめになった空間に美術をセツトすることに、否が応でも都市社会に生きざるを得ないアーティストの決意を感じるのだ。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

作品とは常に現実的な空間への志向が示されるものでなければならないと考えます。それは作品を限定する様々な要因から逃れるための消極的な展開であってはなりません。

仮にいかに逃避しようとも、そこにもまた限定する要因というものは必然としてあるのです。

なぜならば現実には作品以前に、まさに眼前に広がりをもって存在しているのですから。

現実的な空間を真に志向する作品というのはそれらすべての要因を正確に認識し、むしろ作品構造の一部として積極的に受け入れる有機的な構造そのものではないかと考えます。

現実的な空間を意識した作品構造全体の組織化というものが作品形式の如何にかかわらず最も重要なのです。

今回の“ファーレ立川”において私が最も興味を抱いたのは、都市空間と作品という場合の大部分がそうであるように、安易な作品の開放性とか公共性とかによって支えられたものではなく、都市機能そのものとしての美術という、機能との関係の中から作品の位置を思考しようとする新たな視座に対してであるのです。

20年近く前の、「喧噪の中の信号機に作品以上のリアリティーを時として見いだすことができるように・・・。」というある作家の発言を記憶しているのですが、この計画はその先鋭なる意識と同一地平において実現する最初のものだと理解しています。

そして私自身のこの計画の具体化に対する強い期待が、新たな領域に対する不安を伴いながらも今回の参加へと導いているのです。

例えば街路樹間に作品を置くのではなく、あえてそこにベンチを置くことの意味。それは、あらねばならない機能そのものについての考察を通した生きた空間を志向する、より確かな手がかりであり可能性でもあるように思えるのです。

作品（もの）＝文化という安直な図式が現代美術アカデミズムと形を変えていまだ健在である事実に対し、自分自身の態度及び作品に対しての反省と責任を自覚しつつ今後の制作に臨みたいと考えます。